平成３０年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文

高等学校の部　最優秀賞

差別を超えた平和をめざして

会津若松ザベリオ学園高等学校

１年　田村　向日葵

「黄禍」という言葉をご存知でしょうか。黄色いわざわい、つまりアジア人など黄色人種を差別する言葉です。１９世紀末欧米諸国で用いられ、世界の中でのアジアの台頭を警戒し、押さえつけなければならないという発想で生まれた言葉です。日本が日清・日露戦争を経て世界に存在感を示し始めた時代から使用され始めました。背景に欧米の白色人種の優越という思想があることはいうまでもありません。この言葉のもとに世界的にアジア人排斥の動きが広がっていきました。アメリカの大学にいた朝河貫一は、その空気の中で客観的に日本の満州における軍事行動を分析し、データを示して日本政府に警鐘を鳴らしました。彼の考えは『日本の禍機』という著書で示されました。

アメリカの大学で歴史学の研究と教育に取り組んでいた朝河貫一にとって、黄禍論は決して他人事ではなかったでしょう。日米開戦が近づくにつれて、日本人である朝河に対する視線は冷たいものがあったことは容易に予想できます。自由と民主主義の国アメリカにおいてさえも冷静さを欠いた差別があったのです。

世界平和と日米友好を願い、研究者らしく冷静に客観的に行動しようとする自分、そして自由の国アメリカの市民社会から差別的な目を向けられる自分。自分の愛する美しい日本、そして自分を迎え入れ研究者として認めてくれたアメリカ。彼は自分の心身が二つに引きちぎられるような苦しみを味わったのではないでしょうか。大学の講義を終え、夕陽の中を家路につく彼の背中の寂しさが目に浮かぶようです。

私たちは、朝河貫一を日米の懸け橋となった功績のある人、歴史研究の分野で優れた業績を上げた努力の人ととらえています。没後７０年の今年は、彼を顕彰する催しも行われました。しかし、私は今こそ彼が味わった苦しみを自分のこととしてとらえる時だと考えています。

彼がアメリカで苦しんだ時から約８０年の時間が流れました。「黄禍」という言葉は今や死語になったといえるでしょう。日本人やアジアの人々が世界で蔑視を受けることはほとんどないと言っていいでしょう。多様な民族、国籍をもつ人々が国境を越えて交流するグローバル化が進んでいます。しかし、世界から差別や偏見は完全になくなったでしょうか。

７年前の３月１１日午後２時４６分、日本でも観測史上最大規模の震災は容赦なく私たちの日常生活を変えました。福島県沿岸部でも津波被害によって多くの人々が犠牲になりました。その後、原子力発電所の事故によって故郷を離れ避難先での生活を強いられた人もいます。さらに福島県に住んでいるだけで放射線に汚染させたかのように扱う差別や偏見も多くみられました。福島県産の農水産物を避ける「風評被害」は現在でもなくなっていません。「福島県産は買わない」、「いつまでこの町に住むつもりなんだ」、「高額な賠償金をもらっているんだろう」などの心ない言葉が投げつけられました。差別と偏見は子供たちにも向けられました。「福島に帰れ」「放射線がうつる」などの言葉が転校先の学校で投げつけられたこともあります。２０１７年の「避難先での差別やいじめに関する調査」では６２％が「差別やいじめがあると感じる」と答えています。

事実や科学的根拠に基づかない漠然とした不安、被害者に対する自分の優位の確認、自分だけは安全な場所にいて被害者を排除しようというエゴ、そして無視と無関心。これらは「黄禍」という言葉を生んだ心の動きに通じるものがあるように思います。

災害が発生したのは動かせない事実です。しかし、過去の不幸を乗り越え再び希望を取り戻すために福島県の人々は努力を重ねています。支援の手を差し伸べてくださる人もいます。私たちが福島県の復興のために努力するのは、愛する故郷の美しさを取り戻したいと考えるからです。愛する福島に生まれたことで差別や偏見を受けるとしたら、こんな悲しいことはありません。

誰もが世界中からいわれのない差別や偏見をなくしたいと思っています。誰もが平和と安全を願っているはずです。しかし、差別や偏見、抑圧と報復の連鎖はなくなっていません。なぜでしょうか。自分の心の奥に潜んでいる漠然とした不安、わが身を安全な場所において相手を批判する心の動き、苦しんでいる人への無関心などを直視することがないからだと思います。

私は昨年夏に広島市で平和祈念式典に出席する機会を得ました。戦争体験のない私にとって、「戦争」は抽象的な概念でしかありませんでした。しかし、罪のない人々を悲惨な現実につき落とした事実とそれを物語る数々の展示物、被爆者の壮絶な体験談を見聞きし、私たち一人ひとりに戦争と核兵器を世界から廃絶させるという課題が突きつけられたように感じました。広島の人々は戦争が終結した後でも、いわれのない偏見に苦しんだとも聞きました。切実に平和な世界を望む広島の人々の心の動きを、私も自分のことのように感じることができました。

現在私は、英語でのディベートに取り組んでいます。世界中から差別や偏見、暴力、紛争はなくなっていません。核兵器も存在します。どうしたらなくせるのでしょう。相手の主張を正確に聞き取り、自らの主張を根拠を挙げながら相手に投げかけることの地道な繰り返ししかないと考えます。人種や民族、国籍を超えて互いに建設的な意見をぶつけ合うことが真のグローバル化だと思っています。単に友好的な関係を築くレベルを超えて、互いの理性的な議論の積み重ねが私たちの世代に求められているのではないでしょうか。